# 墨州院
# 第37回東京展


**墨州院第 37 回東京展**

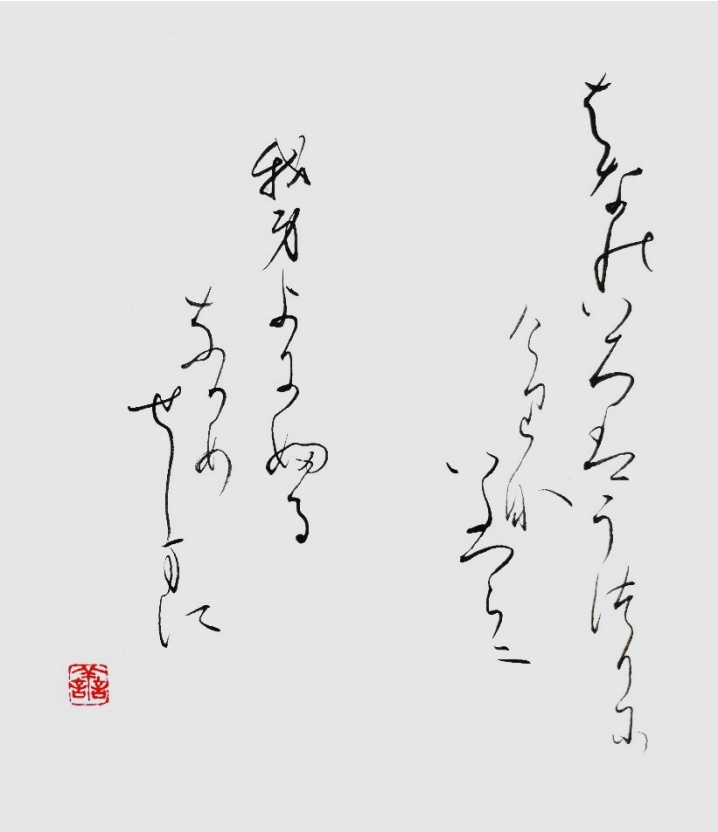
会　期　2024 年 2 月 5 日（月）～11 日（日）
会　場　東京・銀座「ギャラリー向日葵」
主　催　書道研究墨州院（主宰・会長 菊池春苔）
後　援　毎日新聞社・毎日書道会・一瀾書道会

**（作品集）**

発行日　2024 年 2 月 5 日（月）
発行者　菊池春苔
編集者　菊池苔鳳



事務局　書道研究墨州院
岩手県大船渡市大船渡町新田 44-15／電話 0192-27-3406



遺墨
**菊 池 海 雲**（書道研究墨州院創始者）

花の色はうつりにけりないたづらにわが身世にふるながめせしまに
（小野小町）

小色紙（21.2cm×18.2cm）
1980 年揮毫

賛助
福 島 一 浩（東京都葛飾区）

寒鴉己が影の上におりたちぬ（芝不器男）
色紙（27.2cm×24.2cm）

賛助
金 崎 峰 萃（愛媛県四国中央市）

泥中の蓮
八切（68cm×17.3cm）

友交
**松 尾 碩 甫**（東京都北区）

山紫水明（2023 年製）
原寸

# 開催に当たって

書道研究墨州院東京・銀座展は、関東地区在住の会員有志が母体となり運営に当たっております。本部の所在が岩手県大船渡市という遠方であり、その地で開催されるメイン展に訪れるのが困難であるということから、当時、大学卒業したてのメンバーにより創められたものであります。

拠点が遠方の地方にありながら、この東京銀座で長きに亘り継続することは、人員的・時間的・経済的に想像以上の負担や苦難といったストレスを強いられるものと感じております。しかしながら、皆様のご支援・お励ましにより、あの東日本大津波震災・昨今のコロナ禍を蒙りながらも、已むことなく継続できておりますこと、ここに厚く御礼を申し上げます。

創始メンバーは４名を残すのみとなりましたが、初回展前後に誕生した次世代、そして、私どもが創めた年齢となる未来の担い手、更に、大学で書を専攻する若手も出品をしており、スムーズなバトンタッチへのタイミングも近いことと存じております。

令和甲辰立春大吉日

書道研究 墨州院

主宰・会長 菊池春苔

主宰
菊 池 春 苔（岩手県大船渡市）

耕心
2尺×1尺（60.6cm×30.3cm）

主宰
**菊 池 春 苔**（岩手県大船渡市）

龜龍壽（楊子）
尺八屏 1/4（117cm×26.5cm）

主宰
菊 池 春 苔（岩手県大船渡市）

ほでなし（気仙語「分け判らない」）
八切（68cm×17.3cm）

主宰代行
菊 池 苔 雲（岩手県大船渡市）

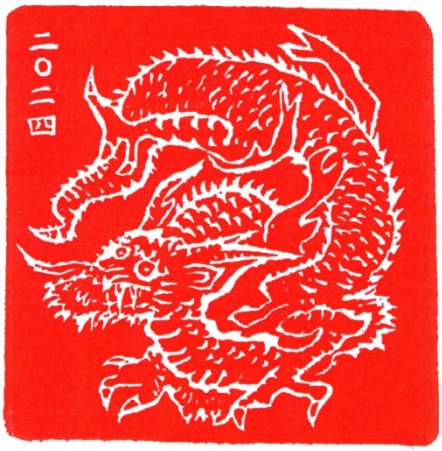
畫龍點睛（『水衡記』より）
八切（68cm×17.3cm）

主宰代行
菊 池 苔 雲（岩手県大船渡市）

南山壽（『詩経』より）
半懐紙（25cm×37cm）

主宰代行
菊 池 苔 雲（岩手県大船渡市）

伏龍鳳雛（『三国志』より）
全紙 1/3（136cm×23cm）



代表
佐々木乾龍（東京都新宿区）

甲辰還暦
原寸

代表
佐々木乾龍（東京都新宿区）

龍
半紙 1/2（33.3 ㎝×12.2 ㎝）

代表
佐々木乾龍（東京都新宿区）

寓寢食於烟墨（呉錫麟）
尺八屏 1/4（117 ㎝×26.5 ㎝）

副代表
眞 壁 紅 蓮（東京都北区）

～書と押し花のコラボレーション～
『水を得た魚』
半折 1/3（45.3cm×34.5cm）

副代表
眞 壁 紅 蓮（東京都北区）

雅
半紙（33.3cm×24.4cm）

副代表
眞 壁 紅 蓮（東京都北区）

日々是好日（『碧巌録』より）
色紙（27.2cm×24.2cm）

実行委員長
羽 山 李 岳（東京都足立区）

清月依微香露輕（李商隱）
全紙 1/3（136cm×23cm）

事務局長
菊 池 苔 鳳（岩手県大船渡市）

『DNA』
半折 1/2（68cm×34.5cm）

事務局長
**菊 池 苔 鳳**（岩手県大船渡市）

慈（T with M）
半紙（24.4cm×33.3cm）

運営委員
佐 藤 苔 翠（神奈川県横浜市）

無罣礙（『般若心経』より）
半折 1/2（68cm×34.5cm）

運営委員
**兒 玉 春 苑**（東京都府中市）

曲則全（老子）
～屈曲の妙を知るべし～
全紙 1/3（136cm×23cm）

運営委員
松 尾 蓮 佳（東京都北区）

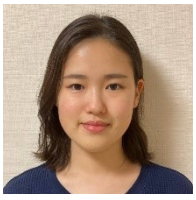
貫徹～あの志を今も忘れない～
全紙 1/3（136cm×23cm）

運営委員
**小松原朴象**（東京都練馬区）

雲從龍風從虎（『易經』より）
尺八屏 1/4（117cm×26.5cm）

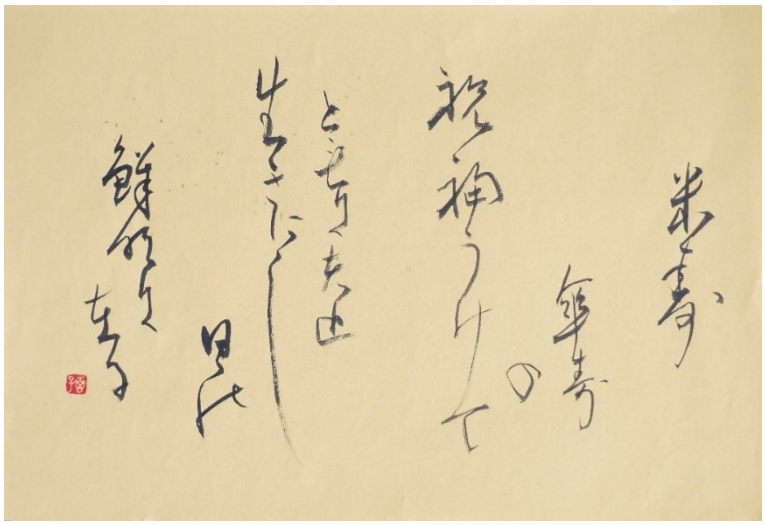
運営委員
中 島 州 麗（埼玉県さいたま市）

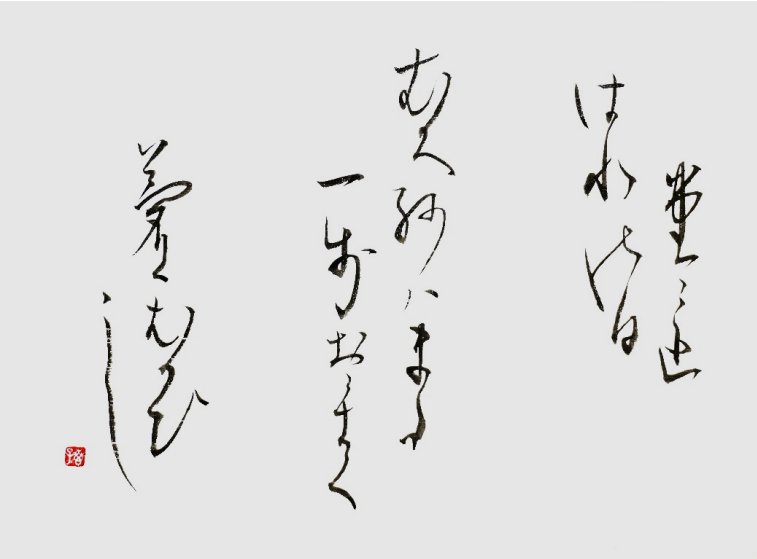
柳暗鶯啼春正妍（呂本中）
全紙 1/3（136cm×23cm）



運営委員
長 澤 千 夏（東京都大田区）

乾坤一艸亭（杜甫）
全紙 1/3（136cm×23cm）





甘 竹 荷 州（宮城県仙台市）

米寿傘寿の祝福受けて共に夫（つま）と生きにし日々の鮮明に在る
堂々とはれの日迎え孫はまた一歩大きく夢に向かいし
（自詠）

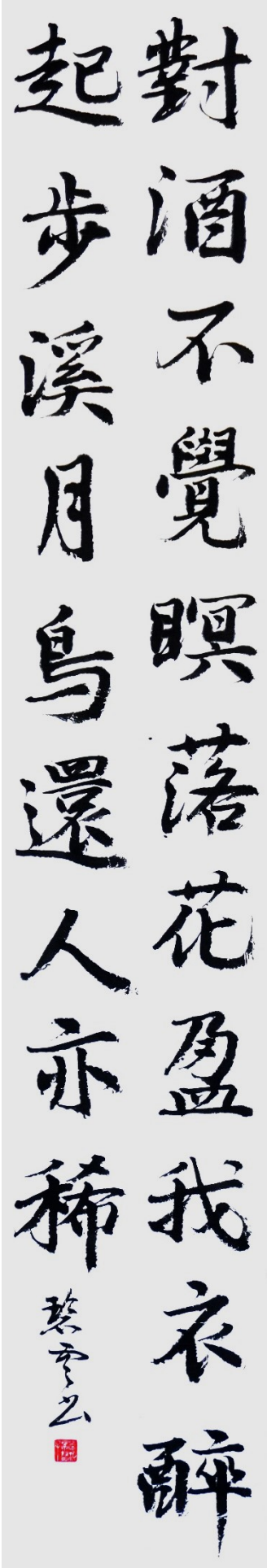
半紙 1/2（16.6cm×24.3cm）×2

大 西 憙 慎（愛媛県四国中央市）

乗雲（伏羲）
半折 1/2（68cm×34.5cm）

菊 池 栖 雲（岩手県大船渡市）

梅花落處疑殘雪（杜審言）
全紙 1/3（136cm×23cm）



菊 池 碧 雲（岩手県大船渡市）

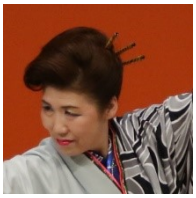
對酒不覺瞑落花盈我衣醉起歩溪月鳥還人亦稀（李白）
全紙 1/3（136cm×23cm）

金 野 州 紅（岩手県釜石市）

臥龍
半折 1/2（68cm×34.5cm）

佐 藤 翠 嶺（岩手県北上市）

魂
半紙 1/2（24.3cm×16.6cm）



佐 藤 扇 凰（岩手県陸前高田市）

龍壽
半紙 1/2（33.3cm×12.2cm）

髙 橋 杏 雲（宮城県仙台市）

百錬剛（劉琨）
半紙（24.3cm×33.3cm）

濱 田 郁 恵（岩手県大船渡市）

柳線花紅（蘇軾）
全紙 1/3（136cm×23cm）

播 摩 蘭 粧（岩手県宮古市）

玉樓春暖笙歌夜（崔魯）
全紙 1/3（136cm×23cm）

武 川 象 濤（岩手県大船渡市）

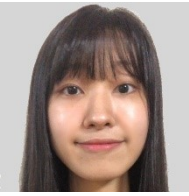
我忘吾（荘子）
半折 1/2（68cm×34.5cm）

Ｕ２３
岡 安 花 穂（茨城県古河市）

憐蛾不點燈（『菜根譚』より）
全紙 1/3（136cm×23cm）

Ｕ２３
菅 野 康 剛（岩手県陸前高田市）

花密流鶯亂啼（馬臻）
全紙 1/3（136cm×23cm）



Ｕ２３
中山ありさ（埼玉県草加市）

清神茗一杯（栖霞）
全紙 1/3（136cm×23cm）

# 特別展示

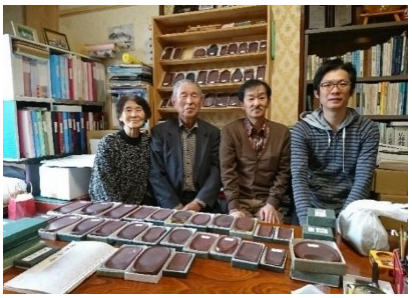
# おらほの硯：～紫雲石硯Ⅱ～

「おらほ」とは、岩手県大船渡を中心とした気仙地域の方言（気仙語）で、「我ら（自分たち）」という意味。

この記述は、学術的・専門的な論評を本意としないことから、難解な表現による混同・錯覚・誤解が事実誤認に繋がらぬよう、できるだけ正確さを保持しつつも、便宜的な表記・表現・造語を用いる場合もある。
硯の特徴は、あくまでも一般的に謂われる主な傾向であり、必ずしも絶対条件・必要条件ではない。坑洞名・年代・石紋等は、硯匠・研究家・専門家・現地バイヤーによる鑑定を始め、専門店などの入手先からの謂れも基にし、独自の判断を加えたものであり、高確度ではあるが、異論もありうるかも知れない。また、硯式・石紋の呼称は、唐硯のものであるが、ここでも使用し、該当のないものは、漢文表現で意味が伝わるような造語を用いた。
寸法は、縦型・横型に拘らず、縦cm×横cm×厚cmまたは高cm×重kg）の順で表記する。硯材の産出地が不明の場合、硯匠の工房・在住地とする。

紫雲石硯原石（岩手県大船渡市大船渡町産）
採石：菊池春苔

紫雲石硯材（岩手県一関市東山町産）
採石・整面：佐藤鐵治



佐藤鐵治氏ご夫妻（左）と六華齋碩甫氏（右）

紫雲石硯は、岩手県の伝統工芸品である。原石(硯材)は、岩手県大船渡市～一関市を走る5億年～3億年前の古生代の地層（主にデボン紀の地層）や、北上山系から産出される輝緑凝灰岩（輝緑岩）で、和硯の硯材としては最古のものである。古生代の海底火山の噴出物の堆積岩が変成し、未だ粘板岩化状にならない剥離し難い石塊や泥岩に近い頁岩で、鉱物学的・組成的には中国・端渓硯と全く同質である。黒色粘板岩層（雄勝硯等の多くの和硯材となる）と石灰岩層の間の狭い層にあるため採石が非常に困難である。歴史は、岩手・藤原京時代（平安時代・藤原三代）から始まる。水沢市(現奥州市)の正法寺付近で採石されたことから、正法寺石と呼ばれた。鎌倉時代、旅の僧侶が大船渡市日頃市町の長安寺で見つけた石を硯にし、これを鎌倉に持ち帰り、時の将軍に献上し、その石質・色・紋から紫雲石硯という名を授かったことが由来であり、この紫雲石を大量に鎌倉へ持ち込み製硯していたことで、鎌倉紫雲・鎌倉端渓とも呼ばれた。その破片が多く見つかったことで、紫雲石は鎌倉産出のものと誤解されたこともある。室町時代には、既に地元で硯として使用されていたという。また、江戸時代の仙台藩主の伊達吉村が、紫雲石の採石される東磐井郡（現一関市）東山町夏山三井付近を御留山とし、一般の立ち入りや採石を禁じ、藩お抱えの硯彫師に作硯させ、端渓や三井端渓、日本端渓と称し、贈答品としていたとの文献もある。さらに、岩手県北上市で、平安時代初期の二面硯（硯石不明）が出土していることから、岩手県における製硯は少なくとも平安時代初期である。とすれば当然、地元の硯材を用いての製硯と考えるのが妥当である。これらから鑑みると、紫雲石硯の起源を、平安時代初期頃としても差し支えないといえよう。

主な特徴は、赤紫色や小豆色の石色で、紫や白の霞が掛かり、緑色や白色の豆斑紋が表出する。極稀にではあるが、最高の硯材と謂われる緑石も産出する。平成20年頃からは、黒石の硯材も使用されるようになった（硯材が輝緑凝灰岩か黒色粘板岩か不明）。現在の和硯中、この紫石・赤石・緑色系では、硯材に紫雲石が代用されていた時期もある山口県の赤間石硯（赤間関硯）が最も著名である。赤間石は4～3億年以上前のデボン紀から中生代の白亜紀の地層が中心で、紫雲石硯の地層より新しく粘土質が強い。また、宮崎県の紅渓石硯は、硯材がほぼ枯渇してしまい、韓国産の輸入がほとんどである。

古くは将軍家で使用され、硯研究の権威とされる書家・学者では小野鐘山・後藤朝太郎・吉田包竹・植村和堂が、和硯最高峰の1つとして讃える。また、空海が啓いた高野山や京都の多くの神社仏閣でメインの硯として使用されている。しかし、一般的には未だ無名に近い。これは、岩手県の広報不足であるのか、国（経済産業大臣）指定の伝統的工芸品に入らないことが最大の理由でもあろう。また、紫雲石硯に関する専門の文献も少なく、書家で紫雲石硯研究家・コレクターである故佐藤平泉氏の『北限の硯～みちのくの紫雲石と硯彫師たち～』である。現在、紫雲石硯の研究やコレクション、資料や硯譜の発行、広報活動するのは、筆者のみかも知れない。他地域の著名硯に対して、質で優っていても名で劣ることに、忸怩たる思いを禁じ得ない。いつの日か、紫雲石硯が岩手硯と呼ばれることが来るのであろうか。

今現在の作硯者は、一関市東山町の佐藤鐵治氏（93歳）ただ一人のみである。大船渡市では、赤崎町の故熊谷瑞泉氏の御娘婿の瑞清氏が休業中で、代わりにそのご令嬢が作硯を始めるかも知れないとの情報もある。

佐藤鐵治氏による作硯の数々

鎮尺（文鎮）

ミニチュア硯

硯の他にも佐藤鐵治氏による鎮尺やミニチュア硯も展示されている。

岩手県一関市東山町

## 白斑飛沫湧霞硯

■蔵No.：KS2019402-00500
■作硯：小野図南（1911～1980）
■時代：1965～1975 頃
■寸法：12 ㌢（31.5 cm×23.5 cm×3.7 cm×5.6 kg）
■特徴：白斑紋（点）・蟻脚跡紋・白霞紋

硯匠でさえも１つは持っておくべきと称される名匠で、書家でもある小野図南による作硯。素晴らしい刻線、正確無比ながらも味わいのある彫で、流石は名匠のなせる業である。図南の特徴は、点在させるように活かす翡翠斑。流麗で穏やかな造形美、そして何より古端渓硯の風合いを感じさせる。また、硯陰（硯裏・硯背）に刻する銘も書家だけあって誠に素晴らしく、今まで見てきた中では最高位であろう。この硯は、平成 31 年 4 月 2 日、書家遺族放出品として 10 面ほど持ち込まれた中にあった。邂逅、見た瞬間に小野図南だと感じ、硯陰の刻銘も確認せず、すぐさま手許に引き寄せた。珍しい白味を帯びた点在する白斑紋が、恰も飛沫のように表出し、全面を這うような蟻脚跡紋や湧き立つような白霞紋が素晴らしい。硯面が粗いのは、敢えて松煙墨や枯墨などの硬い墨を早く磨るようにという意図で、やや大きく強く鋒鋩の目立てをしているからであろうか。もしかすると、紋の最も表出する目立てのためか、これ以上に硯面を削らなかったかも知れない。前所蔵者によってかなり遣い込まれた跡があり、朱や黒の墨汚れもなかなか落ちないが、それが更なる古感に繋がっている。朱墨痕は、紅殻の代わりとしてスレを隠すために施したようでもある。因みにこれを入手の折には、文革直後の 1976 年頃と思われる未使用の老坑端渓硯（山坑）の蘭亭硯（第 35 回展作品集硯譜参照）も一緒に入手した。2 面で、老坑に付いていた当時の値札の 1/20 以下であった。入手者としてはありがたいが、これが価値観を蔑ろにする原因でもある。

岩手県大船渡市赤崎町

## 流咲翡翠五葉硯

■蔵No.：YA20230216-00109
■作硯：熊谷瑞泉（1927～2014）
■時代：1965～1975 頃
■寸法：6 ㌢（15 cm×13 cm×2.5 cm×838g）
■特徴：翡翠斑・蟻跡紋・紫雲條・白霞紋

岩手県卓越技能者である熊谷瑞泉の硯は、東方紫雲として登録商標となっており、中国・天津美術博物館にも認められ、参考展示され、端渓硯と並び称されている。端渓硯が中国より持ち込まれて 5～10 倍もの価格になるのであれば、端渓硯の現地仕入値程度で品質的に同等以上の素晴らしい和硯（紫雲石硯）があることを知ってもらいたいと語り、東京・大阪などの有名デパートで展示即売会等を幾度も開催した。特に関西地区では好評を博した。しかし、デパートでの販売では当然、そこそこの端渓硯も入手できるほどの価格になった。紫雲石硯を周知する余り、本末転倒になってしまったのは残念である。しかし、価格から知る価値観という面では、その功績は大である。天然型、いや、地元の名峰五葉山をイメージした造形であろうか。あくまでシンプルで揺るぎのない厳しく雄々しい強い刻線ながらも、墨堂（硯面）から落潮、そして海（池）への滑らかな曲線美を感ずる。また、翡翠を贅沢に活かし、鋒鋩の立ちも鋭く、硯面と硯内縁の硯を明確に分ける。そして硯縁と硯側・硯陰の穏やかさが、それらをより一層引き立て、一眼一触で瑞泉の手になる硯と判る特徴がある。硯陰の銘は深く強い刻線で、和硯作家中１、２位を争うレベルである。これもその例に漏れず、瑞泉の特徴が発揮され、面目躍如とした佳硯である。流れるような翡翠が全面に咲き乱れ、翡翠と翡翠の間に川の如く紫雲條が流れる。如何にも鋭そうな硯面と全体の優しい造形美とが相俟った素晴らしい硯で、筆者の所蔵する瑞仙硯中でも屈指である。晩年のものは、硯材との巡り合わせの関係で斑紋は少なく、年齢的なものであろうか、表情も穏やかに整い優しく、浅く細い刻銘である。

岩手県大船渡市赤崎町

## 翡翠裂條修長硯

■蔵No.：YA20230902-00047
■作硯：熊谷瑞泉（1927～2014）
■時代：1995～2005 頃
■寸法：6 ㌢（15.7 cm×7 cm×1.9 cm×495g）
■特徴：翡翠（條・斑）・翠霞紋

この硯も熊谷瑞泉の手になるものである。やはり一眼で判る。硯面は小豆色ではなく、確かに赤紫ではあるが、やや暗めで鮮やかさが少ない分、墨堂から海に向かって流れる一筋の翡翠條のコントラストに欠けるのは残念である。しかし、硯面は細微で鋒鋩が強く立つ素晴らしい硯である。石密度が高いためであろうか、大きさの割に重量を感ずる。細身の長方硯ではあるが、硯側に天然の造形を活かした自然な優しい曲線美がある。瑞泉にしては、硯面と硯内縁の硯の明確な差異はなく、墨縁から墨堂への一体感があり、それが自然な優しい曲線美をより強調しているのかも知れない。瑞泉の硯は、和硯で最も高価であるが、これはその最盛期のものである。今回はかなりの安価で出品されていたこともあり、落札することができた。筆者も、岩手県公安委員会から墨硯齋として美術品商の許可を得てネットオークション等で紹介をしているが、少なくとも価格から知る価値観というものを知らしめるという使命感を持っている。ユーザーにはありがたいことではあるが、この名匠の渾身の硯を二束三文にするという暴挙には、芸術文化従事者・墨硯研究家・コレクターにとっては、芸術文化財への冒涜以外の何物でもないと、忸怩たる思い、いや、怒りさえ覚える。こういうことが日本の芸術文化を貶めたりするのであろう。矛盾するが、だからこそ入手できたのであり、それが葛藤でもある。

岩手県一関市東山町

## 昇陽残月硯

■蔵No.：YA20200202-00050
■作硯：桶川穿石（1920～？没）
■時代：1965～1975頃
■寸法：7寸（17cm×10cm×2cm×697g）
■特徴：翡翠（斑・玉・点・鏤）白霞紋

桶川穿石も名匠中の名匠である。15歳で雨畑硯の深澤石渓に師事。20歳で独立し仙台の硯匠吉野新平に身を寄せ、27歳で岩手県一関市東山町に移住し、紫雲石製硯に取り組む。晩年は、紫雲石に留まらず、硯石産出地として御留山とされたほぼ全国の硯材で作硯するという偉業を成し遂げている。和硯の様式は、鎌倉時代～江戸時代を通じ、長方硯と定められており、他の様式は、唐硯の模倣であったといわれる。紫雲石硯は、雄勝硯や雨畑硯の様式に倣ったものであったが、穿石は、出土した古硯の様式や、中国の硯譜を参考に倣古し、更に独自の個性を活かした作硯である。穿石の紫雲石硯は、特に翡翠斑を印象的に活かしたものが多く、自然な造形美と揺るぎのない確かな刻線美が相俟って、やはり一目で桶川穿石の作硯と判る。この硯も、翡翠斑を如何なく活かしたものである。大きな翡翠玉は昇る太陽、小さな翡翠点は残月、他の小さな翡翠鏤は星屑であろうか。墨堂を宙に見立てた表現である。そこには、影響を受けたという宮澤賢治や竹久夢二の人生観や浪漫溢れる美表現があるのかも知れない。

岩手県一関市東山町

## 紫潮猿面硯

■蔵No.：KS20220607-00250
■作硯：桶川穿石（1920～？没）
■時代：1965～1975頃
■寸法：6.5寸（16cm×11cm×2cm×456g）
■特徴：黒眉紋

書家遺族放出品として持ち込まれたものである。その内から4面入手した（1面は手放してしまった。残3面は掲載）。桶川穿石による作硯で、硯式を伝統的な唐硯譜に倣っていたこともあり、紫雲石硯匠の中では、いち早く猿面硯を採り入れた。猿面硯とは、文字通り猿の顔型に似ていることから付いた名称である。その原型は、中国の隋・唐時代に流行した鳳池硯である。鳳池硯とは、硯面が「鳳」字形や箕形で、墨池（海）は臼状、硯陰に二本脚があり、その脚が鳳の脚に似ていることから鳳脚硯とも呼ばれ、太子硯や挿手硯（後頁掲載）の原型でもある。
前所蔵者が長年に亘り手本や添削用で愛用していたのか、拭いきれない朱墨滓がある。罅欠けも散見する。非常に緻密な硯面。やや赤みの強い硯面に黒眉紋が表出し、恰も紅潮した猿の顔に浮き出た血管のようでもある。おそらくは、そこまで意図して作硯したのであろう。因みのこの硯は、先の『北限の硯』にも掲載されているものである。

岩手県一関市東山町

## 陰陽日月両面硯

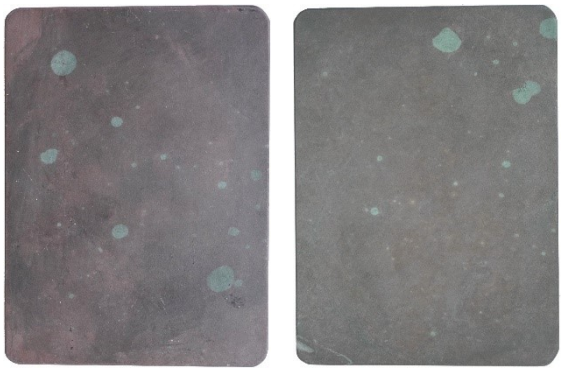
■蔵No.：KS20220606-00400
■作硯：桶川穿石（1920～？没）
■時代：1975～1985頃
■寸法：8.6寸（21.5cm×18cm×22cm×1.73kg）
■特徴：黒眉紋・蟻脚跡紋・白霞紋

入手経緯は、前者同様である。硯面の海に太陽を、硯陰の海には月を象った両面硯である。硯陰は元々通常の状態であったはずで、前所蔵者が後に硯面に加工したと思われる。銘はないが、本来の硯面は、おおらく桶川穿石の手になる作硯であろう。硯陰の作硯は素人のそれであり、銘の刻線は拙いが、文字自体は書家のものである。念々堂とは不明であるが、刻者つまり、前所蔵者の齋堂館閣軒庵の銘であろうか。先の『北限の硯』にも紹介されているもので、作者名は未掲も筆者蔵と記されていることから、前所蔵者は佐藤平泉ということになるが、モノクロの古い本の不鮮明な掲載写真とは石瑕の出が異なるようにも思えるものの、他はどう見ても同じものに感ずる。
翡翠は表出せず賑やかさはないが、控え目で静かながらも黒眉紋や蟻脚跡紋が風格を漂わせている。全体的には小豆色が強い色調の馬肝色であり、端渓硯と騙っても通用しそうな雰囲気である。紫雲石と端渓石は地質学的・鉱物学的に同一であるという証左でもある。以前に父の遺品で、小野図南の最高傑作と謂われる硯を展示した折には、著名な大家が、すごく素晴らしく大きな端渓硯だ、これぐらいの端渓硯はなかなかないよ。今まで見た中でも1番か2番に素晴らしい。何といっても古格がある。と、お褒め下さった。紫雲石硯とご紹介申し上げても、幾度も触れながら、そんな硯あるのか、初めて聞く。本当に端渓硯ではないのか。どう違うの、どう見ても端渓硯だ。と、驚嘆されていたエピソードがある。

岩手県一関市東山町

## 紫雲霞翡翠硯板

■蔵No.：KS20220606-00200
■作硯：桶川穿石（1920～？没）
■時代：1965～1975 頃
■寸法：6 ㌅（15 cm×11 cm×4 cm×1.78 kg）
■特徴：翡翠斑・黒眉紋・蟻脚跡紋・紫雲霞



やや草臥れてはいるが、古格を感ずる。このような素晴らし過ぎる硯材はもう産出しないであろう。紫雲石硯の硯材としては、知る限り屈指のものである。だからこそ、硯材の特徴を十二分に活かすために硯板としたのであろう。硯側の翡翠紋も多く見せるため、大きさの割には厚くも仕上げている。硯板で当然ながら銘は入っていないが、これも刻線や翡翠の活かし方からみて、おそらく桶川穿石の作硯であろう。但し、所謂、面取は硯匠ではなく、角が欠けたか、引っ掛かるかで嫌い、持ち主が加工したのであろうか、違和感を覚える。翡翠斑・黒眉紋・蟻脚跡紋も多く入り、賑やかさがある。端渓硯で謂うところの火捺や魚脳凍も表出し、紫雲色の霞がグラデーションとなって、奥から湧いて来るような錯覚でもある。使い込まれ罅割れもあるが、それが古硯の風合いを彷彿とさせる。硯としての硯板というより、紫雲石の硯材自体を味わうためのものであろう。

岩手県一関市東山町

## 翠覆長方硯

■蔵No.：GEN20230224-00300
■作硯：小野寺紫峰（1920～？）
■時代：不明
■寸法：6.8 ㌅（17.1 cm×11.9 cm×2.2 cm×794g）
■特徴：石瑕・蟻脚跡紋・白霞紋

紫雲石硯は、その名の通り赤紫色の硯材である。しかし極稀に高麗硯の渭元石硯・唐硯の松花江緑石硯（第 36 回展作品集硯譜参照）のような風合いに近い、緑一色の硯材も産出されることがある。磨墨という硯の性能面ではこの緑石が最も優れる。この緑石や黒石は、赤紫や小豆色のものより硬質で細微に感じられる。これは、小野寺紫峰の作硯である。小野寺紫峰は、様々な硯材で作硯することでも知られる名匠である。揺るぎのない刻線で、確かにカチッとした造形ながらも、直の中に曲を感じさせ、単純な四角ではない造形美がある。端渓硯で謂うところの魚脳凍様の白霞紋が全面に湧き、墨堂を歩き回る蟻脚跡紋。硯面・硯陰ともに走る石瑕が引き締め役である。落潮から海の硲に幽かな虹霓紋も架かる。極稀なる緑一色の紫雲石を名匠が作硯した。これで充分であろう。

岩手県一関市東山町

## 雙池鎮尺硯

■蔵No.：（紫）YA20230312-00050
　　（緑）YA20230308-00048
■作硯：松岡卓渓（1919～？没）
■時代：1975 頃
■寸法：（紫）8 ㌅（17.1 cm×3.8 cm×3.3 cm×632g）
　　（緑）8 ㌅（17.1 cm×3.8 cm×3.8 cm×746g）
■特徴：石瑕・黒眉紋・蟻脚跡（紋）・白霞紋

松岡卓渓は、桶川穿石の弟子で、熊谷瑞泉とは兄弟弟子に当たる。元々、紫雲石原石を採石する仕事をしていたが、遂に自らも作硯に携わるようになった。契約した夏山の深い山を掘り、命がけで拘った硯材を採石することで、仲間からは、卓渓ほど良質の石を求める人はいないと言わしめるほどである。当然、作硯にも拘り、伝統的な本漆で仕上げるという熱の入れようである。全国伝統的工芸品展で奨励賞も受賞した名匠である。この硯は、２面共に経済産業省管轄の財団法人(現任意団体)クラフトセンタージャパンに認定されたもので、著名誌にも掲載された文鎮になる硯としても有名である。１丁型の墨で磨墨しても、実用にはなかなか難しいとは思うが、通常の二面硯とは異なった、隣り合わない離れた左右（上下）の雙池で、今までにはない斬新な形状である。偶々、同時期に別々のルートで入手したものである。緑石そのものが極稀で、この形状となれば、更なる希少貴重さが増す。卓渓は旺盛な作硯活動で、その数も多いと思われるが、残念ながら、なかなか市場に出廻らず、筆者も他に１面だけしか蔵していない。また、山室広岳も然り、小野図南となるとほぼ皆無である。おそらく、そのほとんどは、岩手県の書家の愛硯だったはずであり、その遺族が処分したか、業者さんに引き取り依頼をしたのかであろう。余談であるが、県内某著名地の古い土産店２店舗で、昭和 40 年代頃と思われる紫雲石の大硯が、埃を被って忘れられた商品として 10 面ほど並んでいる。今も昔も客は全く興味を示さないのか、50 年以上も眠り続けている。いつか奇跡的に大枚を掴むことが出来たら、それを握りしめ全てを入手に行こうかと思っている。おそらくは、硯もそれを待ち望んでいるに違いない。

岩手県一関市東山町

## 白霞黒氈硯

■蔵No.：Y020231115-00003
■作硯：佐藤鐵三郎（1883～？没）
■時代：1930～1940 年頃？
■寸法：9.6 ㌢（24 cm×18 cm×3.5 cm×2.2 kg）
■特徴：黒氈紋・白霞（斑・点）

この硯は、東山紫雲石硯の草分け山本儀平から数えて三代目、佐藤家としては初代となる佐藤鐵三郎による作硯。現在唯一の紫雲石硯匠の佐藤鐵治の祖父である。鐵三郎は、90 歳過ぎまで作硯していた。米寿を迎えてからもなお、大硯にも取り組んでいた。二代目の幸夫、現在の鐵治もそうであるが、佐藤家は代々長命で、90 歳台でも現役である。この硯は、刀痕からして、最も脂の乗り切っていた頃の作硯と思われる。硯陰の刻銘の線の太さや深さ、鑿勢がそれを物語る。石質から見ても、かなり以前のもので素晴らしい。赤味の強い小豆色の石色、硯面の黒氈紋に白霞点が浮かぶ。微細な鋒鋩で、吸い付くような感触である。おそらく、せいぜい 60 歳前後であろう。鐵三郎の特徴は、落潮と海との落差そのものはあるが、ゆったりと構えながら落ち込む遠浅のイメージで、墨堂に比し海が広く深い。幸夫は、落潮が高く盛り上がり、急に深い海へ落ち込み、海も深い。鐵治は、初代と先代に倣いながらも、巧みにその特徴を活かし、硯式や大小により分けているようでもある。三者の共通点は、海が広く深い。そして光沢感の強い念入りの磨き仕上げであろうか。

岩手県一関市東山町

## 緑沫挿手硯

■蔵No.：DS20180406-00200
■作硯：佐藤鐵治（1930～）
■時代：平成元年頃
■寸法：6.3 ㌢（15.7 cm×9.5 cm 3 cm×942g）
■特徴：翡翠（紋・斑・点）

この硯は、現在ただ１人の紫雲石硯職人で、岩手県卓越技能者の佐藤鐵治の作硯。東山紫雲石硯の草分け山本儀平から数え五代目となる。佐藤家としては三代目である。次代への継承も整っていると聞く。自己所有の山から採石して作硯する。教員（校長）を退職後、町会議員を４期務めた経歴を持つ。本格的に作硯と向き合ったのは教員退職後であるが、20 歳前後から祖父の佐藤鐵三郎に習い、硯材選びや製硯を行っていたという。平成 30 年４月６日、春まだ遅い岩手県一関市東山町の山麓にあるお宅に、篆刻家の六華齋碩甫氏とお伺いし（１頁目写真参照）、２人で持ち込んだ計 10 数面の紫雲石硯の品評をいただいた。驚いたのは、手に取ると一瞬で作硯者を言い当てる。墨堂から落潮、海にかけての刻線で判別するとのことであった。手前味噌になるが、筆者も研究し、刻線と紋の活かし方、全体的な風合いというか表情（書作品で謂えば書風）で作者を判別出来るまでになった。後、紫雲石の歴史やお話を拝聴し、佐藤家に伝わる紫雲石硯と、本旨の鐵治作の紫雲石硯を観賞。その折に入手したのがこれである。30～20 年ほど前の作硯であり、今はもうなかなかこのような硯材は採石できないという。飛沫となって散るような翡翠斑に目を奪われる。硯面だけでは飽き足らず、硯陰まで逝る。もうこれ以外の品評は不要である。硯面は滑らかであるが細微なだけで鋒鋩は鋭く立つ。太子硯の一種である挿手硯の伝統的な硯式である。因みに碩甫氏は、持参したものが鐵三郎と幸雄の作硯によるものと判明したこともあり、佐藤家三代を揃えるべく鐵治硯２面を求めたと記憶している。余談になるが、氏は無刻銘の（おそらく熊谷瑞泉の娘婿の瑞清による作硯）、今まで眼にしてきた中でも屈指の、本当に素晴らしいものを所蔵している。また、筆者の教え子（熊谷瑞泉のいとこ）が持つ、熊谷瑞清の作硯による紫金石風のものも非常に素晴らしい。更に、筆者の元書生も、熊谷瑞泉の最高傑作に数えても良いほどの翡翠斑の美しい名硯を持っている。誠に羨ましい限りである。

岩手県一関市東山町

## 模甕脚台硯

■蔵No.：DS20180406-00070
■作硯：佐藤鐵治（1930～）
■時代：平成元年頃
■寸法：5.6 ㌢（14 cm×8.5 cm×1.3 cm×290g）
■特徴：黒眉紋

これも佐藤鐵治の作硯。先述のものと共に入手。特に目立った特徴はないが、ちょっとした時の実用硯として机上に常備しておくためや、贈答品にでもという気持ちであった。全体の造形からして小判型であるが、落潮はなく、墨池の位置が秀逸である。硯板にアクセントとしての海があるだけの、非常にシンプルな「めんこい（かわいい）」硯である。今こうしてよく見ると、甕を平面的に表現したのであろうか。作硯者を前にして聞かなかったことが悔やまれる。海にも黒眉紋が表出し、まるで海藻のようである。硯陰には前脚の代わりとなる台と２本の後脚。頗る滑らかな硯面は温もりを感ずるが、細微な鋒鋩も確りと立ち、実用硯として申し分のないものである。

作品制作用から
練習用まで常に良心的

# 筆墨硯紙

# きづや西林堂

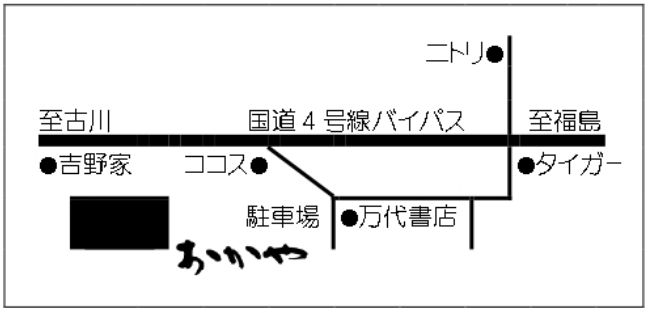
〒020-0063　盛岡市材木町2番25号
TEL 019-623-3341㈹
FAX 019-623-3342

書道用品総合卸小売

筆・墨・硯・書額・画仙紙・仮名料紙・掛軸・額装表具

# あかや筆墨本舗

〒981-3111　仙台市泉区松森字斉兵衛 58-4
ＴＥＬ（０２２）３４６-８１１８
ＦＡＸ（０２２）３４６-８０７７
営業時間／9:00～17:00　※土曜日は 12:00 まで
定休日／日曜・祝日・第１土曜日



伝統的工芸品熊野筆製造

株式会社 一休園

【本　社】〒731-4221
広島県安芸郡熊野町出来庭2-2-44
TEL：082-854-0019

【大　阪】〒580-0014
大阪府松原市岡6-5-50
TEL：0723-35-0605

【東　京】〒224-0003
横浜市都筑区中川中央1-21-1-203
TEL：045-507-6319

【広島筆センター】〒730-0051
広島市中区大手町1-5-11
TEL：082-543-2844

ﾎｰﾑﾍﾟｰｼﾞｱﾄﾞﾚｽ　：　http://www.ikkyuen.com/

E-mail　：　fude@ikkyuen.com

上品で力強くつややかな墨色黒味にこだわった書道液

作品用書道液

玄德

それぞれの濃度に適した伸び、運筆の良さで書き易く、製品の安定性、乾き、表具性に優れた樹脂系作品用液体墨です。

選べる4種の濃度

普通濃度　中濃墨
濃墨　超濃墨

株式会社 呉竹　〒630-8670 奈良市南京終町7-576
TEL:0742.50.2050 FAX:0742.50.2070

呉竹公式 HP▶

墨運堂 検索

特選 書法一品

なめらかな運筆、
美しい紫紺系の墨色。

天然にかわ製

特選 書法一品
墨液・濃墨液

200ml／500ml／2L

創業文化二年（1805年）

株式会社 墨運堂

奈良本社・工場／東京店／福岡（営）

(本　社)　〒630-8043奈良市六条1-5-35
TEL：0742-52-0310　FAX：0742-45-6880

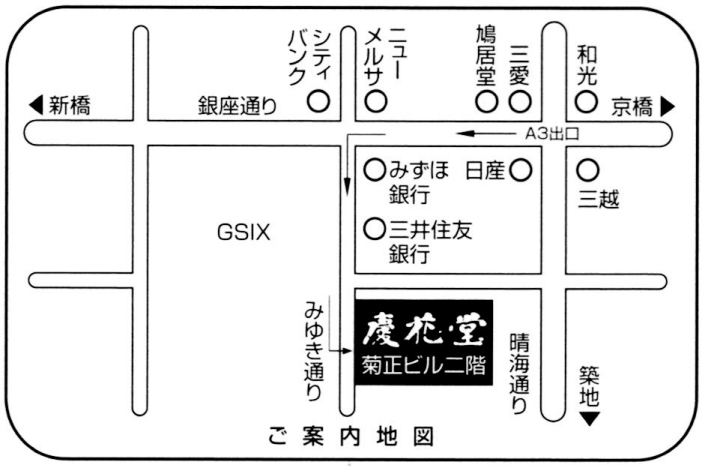
(東京店)　〒270-0013松戸市小金きよしヶ丘4-10-2
TEL：047-347-5100　FAX：047-347-1641

優良 書道用品専門店

銀座店 慶花堂

誠　実　求めて安心
責任ある販売　使って安心

銀座店のみ日曜・祭日営業　午前10時～午後6時




ご案内地図

フリーダイヤル
0120-88-2017

〒104-0061
東京都中央区銀座5-9-13
菊正ビル2F
TEL・FAX 03(3573)5011

地下鉄・銀座線 出口A3(徒歩2分です。)(丸ノ内線、日比谷線も近いです。ご利用下さい。)銀座にお出掛けの折りにはぜひ共お立寄り下さい。

本　店　TEL (03)3647-4346～8　FAX (03)3647-4384

書道用品と表装・額装

# キヨー和

**新宿本店** 〒169-0073 東京都新宿区百人町 2-21-23
<年中無休>
TEL 03-3367-4451 FAX 03-3367-4453

名古屋店 TEL 052-263-9401
<定休日 毎週水曜日> 名古屋市中区栄 4-2-10 KURIビル 2F

仙台店 TEL 022-262-3861
<定休日 毎週水曜日> 仙台市青葉区中央 2-10-20 シエロ広瀬通ビル 2F

横浜店 TEL 045-641-8320
<定休日 毎週水曜日> 横浜市中区常盤町 2-17 常盤町新井ビル 4F

宇都宮店 TEL 028-610-1139
<定休日 毎週水曜日> 栃木県宇都宮市東宿郷 3-6-1

市川店 TEL 047-314-0044
<年中無休> 千葉県市川市南八幡 5-10-7

ネット販売 www.kywa.jp

《店舗営業時間》AM10:00 ～ PM6:00 <仙台店のみ日曜・祝日 PM 4:00 迄>

-文房四宝輸入の専門商社-
協和貿易株式会社
〒272-0023 千葉県市川市南八幡５－１０－７ 協和ビル２Ｆ
TEL 047-314-6002 FAX 047-314-6004

藤和額装株式会社

# TOWA

■書道展用貸額
■屏風
■書画御表装
■原拓裏打ち
■古書画修復

本社・工場
〒234-0054 横浜市港南区港南台7-51-12
TEL.045-833-5273(代)
FAX.045-833-5275

YouTube

書のひろば

～Calligraphy～

毎日書道会公式 YouTube チャンネルに墨州院第 35 回東京展が特集されております。

YouTube

墨

墨州院公式 YouTube チャンネル。展覧会の様子等を公開しております。

墨州院

墨州院の公式ホームページ。最新情報や稽古日程、メディア掲載情報もチェックできます。

YAHOO! JAPAN オークション

美術品商墨硯齋

美術品商墨硯齋のオークションサイト。オークションへの参加はもちろん、文房四宝の見識も深めることができます。